

令和元年度 第3回八戸産学官連携推進会議 議事録

日 時 令和2年2月12日（水）10時15分～11時00分
場 所 八戸市庁本館3階 議会第三委員会室
出席者 小林 眞 八戸市長
河村 忠夫 八戸商工会議所会頭
水野 眞佐夫 八戸学院大学学長
赤羽 卓朗 八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長
長谷川 明 八戸工業大学 学長
圓山 重直 八戸工業高等専門学校校長

以上6名

1. 開 会○司会（八戸工業大学・高橋教授）：

ただいまから、「令和元年度 第3回八戸産学官連携推進会議」を開催いたします。まず、はじめに委員の交代がありましたので、事務局よりお知らせいたします。福島哲男委員の後任として、八戸商工会議所 会頭の河村 忠夫委員に御就任いただいております。それでは河村委員より、一言ご挨拶をいただきたいと存じます。

○河村委員（八戸商工会議所 会頭）：

11月1日から福島前会頭から指名されまして、商工会議所の会頭として受けました。まだ2ヶ月ですのであまり先々広く分かりませんが、ひとつ皆さんからご指導していただきたいと。それから今年80周年でございます。「つなぐ絆、地域と企業の未来のために」というスローガンで頑張っていきたいと思っておりますので、皆様からのご指導をよろしく願いして挨拶に代えたいと思っております。よろしく申し上げます。

○司会（八戸工業大学・高橋教授）：

次に、本日お配りした会議資料を確認頂きたく存じます。本日の会議資料は、

- ・次 第
- ・出席者名簿
- ・席 図
- ・資料1：八戸産学官連携推進会議 設置要綱
- ・資料2：令和元年度 第2回八戸産学官連携推進 会議 議事録
- ・資料3-1：産学官連携による八戸未来創造 中長期計画（案）
- ・資料3-2：中長期計画（案）前回会議からの修正箇所一覧

・資料 3-3：中長期計画 進行管理スケジュール(案)
となります。過不足等はありませんでしょうか。それでは、議事に入りますので、小林市長に進行をお願い致します。

2. 副会長の選任について

○小林議長（八戸市長）：

それでは、しばらくの間、議長を務めさせていただきます。まず、案件（1）副会長の選任について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

それでは、副会長の選任について、ご説明いたします。お手元の資料1の「八戸産学官連携推進会議 設置要綱」をご覧ください。第3条の「組織」のところをご覧ください。第1項は、推進会議の構成員は、関係機関の長とすることを規定しており、これに基づき、今回より、河村委員にご参加いただいております。次に、第3項をご覧ください。ここでは、副会長にすることが規定されており、その選任にあたっては、構成員の中から会長が指名する者をもって充てるとされております。これまで、副会長は商工会議所の福島前会頭に務めていただいておりますため、現在は、副会長が空席となっておりますため、本日は、本会議の会長である小林市長より、新たな副会長をご指名いただきますよう、お願いいたします。事務局からの説明は以上でございます。

○小林議長（八戸市長）：

それでは、副会長につきまして、私の方から指名させていただきます。地域経済やまちづくりなどの幅広い分野において、豊富な知識とご経験をお持ちである河村委員に副会長をお願いしたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

（異議なしの声）

ありがとうございました。それでは、副会長は河村委員をお願いいたします。どうぞ、よろしくをお願いいたします。

3. 令和元年度 第2回推進会議の議事録について

○小林議長（八戸市長）：

それでは、案件（2）第2回推進会議の議事録について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（八戸工業大学・高橋教授）：

それでは、第2回推進会議の議事録について、ご説明申し上げます。お手元の資料2の「令和元年度 第2回八戸産学官連携推進会議」をご覧ください。ここでは、前回会議の議事録内容につきまして、皆様にご確認いただきたく存じます。なお、資料のページ数も多いことから、今回は、主に、後半の委員の

皆様からのご発言の概要を中心に説明させていただきます。それでは、1ページ目をご覧ください。今回は10月8日の14時からの開催でございました。

まず、開会の後、今回と同様に、前回会議（第1回推進会議）の議事録を確認いたしました。次に、3ページをお開きください。議事録の確認が終わり、中長期計画（案）について、事務局より、前回新たに設定した、6つの指針に対する「進行管理指標」などについて、説明させていただきました。次に、5ページをお開きください。ここから、事務局からの中長期計画（案）の説明に対して、委員の皆様から、それぞれご意見を頂いております。まず、八戸工業大学の長谷川学長からは、5ページから6ページに掛けて、若年者の移動（社会動態）について、年次で変化を把握してはどうか、人材育成において、高等教育機関がカリキュラムを検討するあたり、産業界や行政から意見をいただきながら、地域ニーズに答えていくことが重要などの意見をいただきました。次に、6ページから8ページに掛けて、八戸高専の圓山校長より、中長期計画案の「地域の現状」において、畜産品やハイテク技術など、元気な産業のデータを入れられないか、同じく、観光入込客数を日本人と外国人に分類できないか、6つの指針の中に、昨年、八戸高専で立ち上げた財団法人でも事業として取り組む、高等教育機関の卒業生のUターンの促進事業を文言として入れられないか、などの御意見をいただきました。次に、8ページから9ページに掛けて、小林市長より、畜産分野は、県内の農産品出荷額全体で1番であること、また三八地域では、畜産が5割以上であること、中心街では、テレマーケティング関係が増えてきており、若者や女性の就業者も増えてきていること、観光入込客数から外国人観光客は把握できないが、宿泊者から外国人を把握することができ、ここ10年で急速に増えてきていること、Uターンに関して、県内でも八戸市は移住者が多く、移住相談の件数も増えている点、来年度、連携中枢都市圏で、移住等を働き掛ける拠点を東京に作ること、などの御意見をいただきました。次に、10ページをお開きいただき、八学大短期大学部の杉山学長より、学術分野マップの文系・理系の分類に違和感があること、地域と学を俯瞰できるようなマップにできないか、などの御意見をいただきました。次に、11ページをお開きいただき、八学大の水野学長より、八戸の未来の姿として、「学問の都八戸」の提案、異分野が融合し、俯瞰できて、共同で何か取り組める学術分野マップの検討、などの御意見をいただきました。次に、12ページから14ページに掛けて、商工会議所の福島前会頭より、水産業全体の現状が、50年前よりの悪化していること、EUでも水産資源は減少する一方、モロッコでは、人口増加に加え、魚食が普及してことなどを踏まえ、魚食についても、人間に基本的な部分として、もう少し掘り下げて考えていく必要があるのではないか、などの御意見をいただきました。以上の意見を踏まえ、15ページになりますが、引き続き、次回会議までに、中長期計画の策定作業を進めるようご指示いただいたところであり、最後に、案件以外で、八工大の長谷川学長より、八戸市と八工大が共催で実施している3.11の防災フォーラムが令和3年で10周年の節目を迎えることから、取組内容について、本会議を通じた横の連携により、一緒に検討できないかという提案を頂きました。駆け足での説明となりましたが、事務局からの説明は以上でございます。

○小林議長（八戸市長）：

はい、ありがとうございました。ただいまの説明に対し、ご質問やご意見はありますでしょうか。質問等はないようですので、以上でこの案件を終わります。

3. 副会長の選任について

○小林議長（八戸市長）：

続いて、案件（3）中長期計画（案）について、事務局から説明をお願いします。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

引き続き着座にて説明をさせていただきます。お手元の資料3-1に従って説明をさせていただきます。まず初めにこの計画のポイントについてご説明申し上げます。この計画は若者人口の増減数というものを一定の目標として定め、それを達成するために21ページ以降に記述した6つの指針に従った事業の方向性に基づき、若い世代が地域社会と地域産業を深く理解し、持続的に生活できる、又は生活したくなる社会を将来ビジョンとして掲げ、産学官が連携して事業を進めていくというものであります。次に前回の計画案に対する加筆修正につきましてご説明を申し上げます。これにつきましては先ほど議事録の確認でもございました学長、校長先生より出されたご意見に対するものであります。まず、長谷川学長からのご意見につきましては第一に若者の移動に関する経年変化ということでございますが、今後の進行管理におきまして、住民基本台帳等により確認をして参ります。第二に地域ニーズに対応した人材育成方針、あるいはカリキュラム構成についてございますが、21ページの（1）地域ニーズに応じた人材育成・研究成果の創出に基づきまして、産業界等からの意見聴取を行う体制を整えてまいります。圓山校長からのご意見につきましては第一に製造品出荷額データからIT、半導体、あるいは畜産についてのご提示でございますが、ITもしくは半導体につきましては抽出ができませんでしたが、畜産につきましては13ページで取り上げております。第二点目の高専が力を入れ始める卒業生のUターン促進事業につきましては22ページの（2）地域の中核的な産業、ものづくり、農林水産業・観光業等の振興と雇用創出の「学」の役割分担として掲載をさせていただきました。杉山学長からのご指摘につきましては、学術分野マップからの文理の枠組みをなすというかたちで対応させていただきました。水野学長からのご意見につきましては21ページの（1）地域ニーズに応じた人材育成・研究成果の創出に基づきまして今後の事業展開の中で新たな学術マップを構築してまいりますことといたします。なお、統計数値等の修正箇所につきましては、資料の3-2をご参照いただけますようお願いを申し上げます。第3にこの計画策定後のスケジュールにつきましてご説明申し上げます。資料3-3、カラー版でございますが、これをご覧いただきたく存じます。推進会議は年1回9月頃を目途に開催いたす予定であります。事務局会議は年3回程の開催予定でございます。その間会議の構成機関それぞれが、事業を単独もしくは共同で

進めてまいる予定でございます。中長期計画案につきましての説明は以上でございます。

○小林議長（八戸市長）：

はい、それではただいまの説明に対して、ご質問等ございますでしょうか。

○長谷川委員（八戸工業大学 学長）：

色々と意見を受けてご検討いただきありがとうございます。1点なんですけれど、八戸市の総合計画の今現在策定作業を進めて、皆さん関係していただいているんですけれども、その活動とこの私たちがやっている産学官連携による中長期計画とのすり合わせと言いますか、総合計画では今年の8月かその辺に策定を終える予定で、順次作業進めております。この席でもメンバーになっていらっしゃる方もいらっしゃいますし、事務局は一緒ですから、できたらどこかにすり合わせを調整されるような努力も是非やっていただくとありがたいなと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひします。

○小林議長（八戸市長）：

何か事務局のから発言あります、今の点で。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

はい、この計画につきましては、総合計画の整合性、すり合わせ等も含めて今後事務局で検討させていただきますので、よろしくお願ひいたします。

○小林議長（八戸市長）：

その他にございますでしょうか。

○圓山委員（八戸工業高等専門学校 校長）：

今、長谷川先生がおっしゃられた総合計画の件でございますけれど、私は交通網とかそっちの方の文科会を担当しておりますが、この産学連携と総合計画はかなり共通なところがあるので、もしその中で抽出できるものがあれば、ここにメンバーもほとんど同じというか、ここのこのメンバー皆さんおいでなので、そういうのも入れていくと少し膨らみのあるものになるのかなと。例えば、私どもの方で議論になっているのは、産業の方でいうと高速道路に直結するその交通網の重点的整備が、つまり港から揚がってきたものを三陸自動車道に流すためにちゃんと大きな道路を整備して、八戸がやはり交通の拠点として、産業の中核としてというふうな、ここの中にそういう視点は入ってないんですが、これは「学」が結構ここに多いので、そっちの視点でなってるんですけれど、そういうふうなもう少し大きな視点のなかの産学官連携というところを考えると、そういうものも入ると思いますので、その適宜入れ込んで、少し膨らみがあるものにするというのも大事ななと思っておりますので、追認意見で申し訳ございませんが、よろしくお願ひいたします。

○小林議長（八戸市長）：

今の意見も踏まえてよろしくお願いします。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

はい、かしこまりました。

○小林議長（八戸市長）：

その他ございますか。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）

代理で来ております八戸学院短期大学赤羽と申します、よろしく申し上げます。資料の8ページの図なんですけれども、ちょっと今の話題とずれるかもしれませんが、各大学の卒業生の県内外の就職状況が記載してありますけれども、これ実際に青森県あるいは八戸市出身の人がどのくらい残っているのかというのは分かるのでしょうか。つまり八戸の高校から来た生徒さんが大学の学生になって卒業するとき他に他に出ているのか。他の地域から来た人達がまた戻っているだけなのか。その逃げられ率というんですか、大学卒業したら出てっ
てしまっている人も多いのか。八戸の出身の生徒さんが大学に入って学生になって就職するときやっぱり八戸に残っているのか、首都圏とかあるいは県外に出ているのか、その辺りの資料というのはございますでしょうか。

○事務局（八戸工業大学・高橋教授）：

8ページの図9に表しているのはそこまで細かいデータにはなっておりません。あくまでも青森県内に本社所在地がある企業を青森県内企業として、それ以外の企業さんは県外企業としてデータ化したものであって、例えば本社が東京の方にあって実際にはこちらの方に勤めているというところまでは現実的になかなか各大学の中では把握可能か、ちょっと難しいと思いますね。どこにいるかというのは卒業後なかなか把握が難しいので、本社所在地で作っているデータになっております。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）

そうするとその自治体に、高等教育機関を出た学生が、どういったところで生活しているかということは把握できていないということになるわけですね。

○事務局（八戸工業大学・高橋教授）：

そうですね、細かいところまでは把握できてないですね。県内企業に、県内の本社所在地がある企業に勤めているか、県外の本社企業に勤めているかというのが図9のデータで、各学校においてはもう少し細かいデータは取れるかと思いますが。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）：

例えば吉田産業さんに就職して岩手県に勤めると、青森県に就職したというこ

とになると。

○事務局（八戸工業大学・高橋教授）：

そうですね。今現在学生がどこにいるかというのはなかなか学校の中でも把握は難しいかと思います。そういった意味でも同窓会とか圓山先生の方でやられているような活動というのが重要になってくるのかなと思います。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）：

それは卒業時の話ですね。

○事務局（八戸工業大学・高橋教授）：

そうです。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）：

卒業時だと把握可能かもしれないですけどね。就職届とかなんかを通じて、田中先生どうでしょうか。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

本学の場合のみですけれど、最終進路報告書というのは書かせて、卒業後の勤務地についてもおそらく把握できるかと思いますが、かなり大作業になると思います。八戸市出身かどうかというところの区分、もしくは分類というのは結構時間が掛かる作業になると思います。

○小林議長（八戸市長）：

高等看護学校を八戸で市でやっていますけれど、北海道とか市外から入学している人の数も一定割合結構います。半分まではいかないかもしれないですけど。そういう人は大体市内には残らない率が高いですね、実際は。ですから、大学でも市内の入学者、市外からの入学者で明らかに傾向が分かれる可能性は確かにあると思います。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）：

ついでですけれども、要は八戸から他の地域の大学に入った人で、それはなかなか把握することは難しいかもしれません。八戸にどのくらい戻って来ているのかということも本当は知りたいところではあるんじゃないかなと思うんですけどね。

○小林議長（八戸市長）：

調べられるかどうか。そもそもデータが取れるかどうか。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

そうですね。U・I・Jターンの掛かる事業というのを八戸市でやっておりますけれども、そういったところで把握ができるかどうか。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）：

企業と連携すればある程度可能かもしれないですね。各企業さんで新卒の人で他県の大学に行ったけれども八戸市出身で戻ってきた人が何人いるのかということ、およそは把握できる可能性はあるんじゃないかと思えますけれども。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

その点は個人情報という問題がございますので、どこまでそれができるかは検討してみないとわかりませんが、努力はいたしたいと思えます。

○小林議長（八戸市長）：

人口構成を見ると18歳のところでずっと落ち込んで、24歳か卒業のあたりでまた復活している。これは行った人たちが帰ってきているのではなくて、その年代の人たちが要するに市内の企業に、他の出身で東京の大学を出て、東京の会社に勤めて八戸こっちの方に来ているという人が相当いるんです、実はですね。ですから、そういう若い年代の人が一定数いるというのが特徴だと思いますけれども。そういう分析も是非必要だと思いますので、今のご指摘踏まえてその辺の、その高等教育機関の卒業から八戸にいる人たちの、一体どこから来ているのかとかそういう分析っていうのは面白いというとおかしいですけども必要かもしれないですね。今この場で直ぐ答えは出ないんですけども、少し事務局の方でご検討いただけたらと思います。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

はい、かしこまりました。

○圓山委員（八戸工業高等専門学校 校長）：

Uターンの話でちょっと先ほど、本校でここにも書いてありますように、これは別に変えろという意味ではなくて、参考までにお知らせいたします。発表しなければいけないことがあって少しデータを調べさせていただいたんですが、本校の場合、さっき言った本社がどこというので多分やっているんですけども、県内に残る、県内企業に残る学生の割合は色々編入学とか大学院でまた東北大学に、あんまり弘前大学に行かないんでうちは、そういうことで県内に進学しないんですけども、そういうのも全部みんな県外と考えてやりますと、15%しか県内就職致しません。ところが同窓会の名簿を調べまして、今卒業30年以降の方を調べたのですが、青森県にいるかというところ27%います。つまり15%しか残らないんですけども、それは出たり入ったりするんですが、最終的には27%残るんですね。これは非常に大きな数字だと思っています。つまり関東地区で働いて、そしていろいろな理由で戻って来てそして地元で活躍しているという人が非常に多い。私も企業に色々伺わせていただいたんですが、「実は先生私も出戻りなんですよ」という方いっぱいいて、それは関東の企業とか関西の企業に勤めておられて、何らかの事情があってこちらに来られて、そして中企業さんが多いんですけども、その工場長だとか部長だとか要職で、要でやっておられる方が非常に多い。そういうこともございますのでUターンの支援というか、

卒業生のネットワークを使ったUターンの支援というのが結構いけそうだなと、データの中でもありますね。それが今何もしない状態でそれですからもしそういう形で戻って来たら良い職があるよというふうな形でのお手伝いができるのであれば、それがもう少し上がるかもしれない。そういうふうなことで今この議事録にも書いてある財団を立ち上げさせていただいたわけですが、成果がでるのは来年度以降なので、来年度に実際にどういうふうな事例があるのか、もし機会があったらこういう委員会でもお示しして、それで数年後にこれが上手くいくとなれば、学院大さんとか工大さんでもそういうふうな仕組みを取り入れて、そして市が色々な助成もありますから、戻ってきたときには医療とか住宅とか、それを色々合わせ技でやると、戻ってきやすいと。われわれがやろうとしているのは、やはり本校とつながりのある元気のある中小企業さんに紹介すると。そうでないと普通のハローワークに行ってもたまたまそこで求職のある人がポンと入るとなると、条件があんまり良くないんですが、例えば高専の卒業生だったら、今求職出してないけれど欲しいという企業いっぱいあるんですね。そういうふうな所にちゃんと出す。それは学院大さんも工大さんも、例えば地元企業で活躍されている方が「うちの卒業生だったら求人出してないけど来てほしい」という企業さん多いと思うので、そういうふうなネットワークというのが今後大事なのかなと。ただここに書きちゃうとやらなきゃいけなくなって失敗すると引っ込みつかないので、来年度ぐらいにそういうふうな事例を出させていただければと思いますのでよろしくお願いいたします。

○小林議長（八戸市長）：

今のハイテクの企業は、本社は八戸市内になくて、関東方面なんですけれど採用はここで採用して、採用予定者を見させていただくと高専、工大の卒業見込みということ実際にあります。これでいくと県外になっちゃうんですよ。多分ここで採用するといっても研修はそっちであったり、色々行ったり来たりがあるんですけども、その辺ちょっとなかなか難しい面があります。その他、宜しいでしょうか。それでは質疑はこのくらいといたしまして、原案に対する修正意見等ございましたらご発言いただければと思いますけれども。

○長谷川委員（八戸工業大学 学長）：

ちょっと気になる話なんですけれど、18 ページのところ将来ビジョンのメッセージとしてどうしてもこういうふうな書類の中でどういうふうなことがこれからの目標ですかというお話になると思うんですけど、この通りというときにですね、若い世代が云々と主語が若い世代がと書かれておまして非常に大切なことはわかるのですが、とりわけ大学、それから高専という対象は若い世代だよと、その意味ではその人たちがっていうのが主語で良いのかもしれないんですけど、私たちがやろうとしていることは決して預かっている学生たちがこうこうなって欲しいということだけではなくて、それを通して八戸市が、八戸市の市民がひとりひとり元気で活躍しやすい環境づくりと言いますか、そういうふうな風土の中に若い世代の成長というのを私たちがサポートしますというメッセージのように感じるんですね。市民がこれを見た時に少し受け止

めとして、私たちの活動を市民の皆さんも一緒になってやりましょうねというのが、商工会議所もお加わりいただいた産学官の組織体系だと思うんですけども、そういう意味だともう少し言葉を若い世代もとか少し広がりのある言葉に余裕を持っていただくと多くの人に受け入れていただき易いようにも思いました。これは私自身の感想なんですけれども、歳を取っているからそう言っているからかもしれないですけども。これは検討していただければと思います。

○小林議長（八戸市長）：

本文も同じように書いているんですね。

○長谷川委員（八戸工業大学 学長）：

今どちらかというとなんか若いとか高齢者とか、高齢化社会ですから当然ですけども、高齢化率が高くなっていく方向に今いるわけです。その時に排他的にするのではなくて、そこを何と言いますか、囲い込んで、どちらかというとなんかユニバーサルなメッセージとしてお伝えいただく方が良いんじゃないかと。本音はこうだとしてもですよ。ターゲットはこうなんだけど少し広がりを持ったメッセージの方が受け入れ易くないかなというふうに感じました。

○小林議長（八戸市長）：

なるほど。今の発言について事務局から何かありますか。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

特にここのビジョンのところは今長谷川先生もおっしゃったように若い世代にのみにフォーカスしているということではなく、私どもも含んで、地域社会と地域産業を深く理解し、持続的に生活できる、または生活したくなるというよな思いも込めているというふうにご理解いただければというふうに思います。

○小林議長（八戸市長）：

若い世代が要は既に活躍しているというよな。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

地域社会、産業を深く理解していただけているというよな理解でございます。

○小林議長（八戸市長）：

今長谷川学長さんがおっしゃったものも踏まえてそちらのフォーカス的な人が、より若い世代を含めた形での地域の皆さんの活躍というかその辺が表現上分かるよな形に少し調整した方が。

○圓山委員（八戸工業高等専門学校 校長）：

文言はあまりそういうのはこの委員会ではあんまりあれなんです、例えば若

い世代がというのが一番最初に出るんじゃないくて、八戸地域の住民、皆が地域社会と産業を深く理解し継続的に生活でき、若い世代が生活したくなる社会となるようなまちづくりというそういうふうな形になると、若い世代を中核にしてまちをつくっていくというふうなイメージがまだ精査していないので文言が、そっちは事務局でお願いしたいのですが、そういうふうなニュアンスが多分長谷川先生のお考えなのかなと、まち全体を。

○長谷川委員（八戸工業大学 学長）：

田中先生も共通していると思いますけれども、要するにそれを今度私たちのこのテーブルでは理解しあう言葉なんですけれども、しかしそれが今度市民に出で行った時に主語がそうになっていて、他の世代に対しての配慮が欠けているように受け止める人がいないことを、いなければ良いんですけれどもという話なんです。ですから、そういう懸念があるんであればできれば少し丸い言葉を選んだらと。結局 19、20 代辺りでドンと出て行ってしまってなかなか戻っていただけないというそこが大きな課題だということの受け止めは共通しているわけですけど。

○小林議長（八戸市長）：

今の長谷川学長さんの意見を踏まえて少し表現に。

○水野委員（八戸学院大学 学長）：

各大学に事務局のメンバーがいますので、きちっとそういう思いを事務局メンバーに伝えていただいて各大学から事務局がそのメンバーの思いをきちっと事務局で調整していただくという形で、今の熱き思いを各校の事務局員メンバーにお伝えいただけたらと思います。そういう方向できちっと丁寧に修正していただければと思います。

○小林議長（八戸市長）：

次回の会議に向けて今のご意見を踏まえて、最後の質問で宜しいでしょうか。その他ございますか。

○水野委員（八戸学院大学 学長）：

修正案ではないんですけれども、一点コメントさせていただいて宜しいですか。今回河村会頭をお迎えして 21 ページ、先程の市の総合計画とこの会議の区分けというか、調整ということも含めて、図 26 を見てみました。この会議の強い特徴のひとつというのが、産官学の連携の中でも特にこの市の高等教育機関、この 4 校がしっかり連携していることだと思っています。青森市や弘前市と比較してもこれほど丁寧な連携をもって、そして市と連携して、あるいは商工会議所と連携してチャレンジできるということは他にはないのではないかなというのが実感です。私の質問というか今後検討していただきたいのはやはりこの高等教育連携機関が何か取り組み、チャレンジしようとするとしても財政的な基盤が要るんですね。市、あるいは商工会議所等にもお願いなんですけれども、

この産官学で何かやろうとした時にこういう取り組みだと財源がありますよという情報が定期的に、少なくとも私の耳には届いてないんですけれども、そういういろんな可能性というのがあるんでしょうか。事務局の方。ごめんなさい、田中先生に確認していなかったんですけど、もしそういう財源の確保の方向性があるのであれば、こういうところにもそういう加えておいていただいでみんなで共有しながら連携を強化していくということも可能かなと思いました。以上です。

○小林議長（八戸市長）：

国の仕組みの中で地方創生交付金とまち・ひと・しごとの絡みで連携事業についても幅広い行政の取組に対する支援制度というのがあります。ただメニューが結構決まっています、そのメニューから選んでいくような形になりますので、そういった実はもう来年度分は申請して決定が出ているぐらいの今タイミングなので、令和3年度に向けたその予算要求であったり、あるいはもし仮にあるとすると来年度の補正予算とかですね、そういった事業メニューも出てきますので、そういった情報をお渡ししてですね、正に産官学連携の事業としてこんなのが当てはまるかどうかということのご提案を受けるようなそういう形をとっていきたいと思います。われわれだけで国からきたものを見ながらこれに当てはまるか、これは当てはまらないとやっているのが現状ですので、どこの行政も大体そうだと思いますけれども、少しそういう情報を流せることは流せるので、今のご指摘踏まえて、これからそういうふうにしていければと思います。

○圓山委員（八戸工業高等専門学校 校長）：

その件につきまして、こういうものって、それからさっきの総合計画の方も含めてやはり予算が無いと動かない、それから予算が出て人が集まらないとか色々あって重要だと思います。ひとつ、これはもう少し上の話になりますけれども、私が大学にいた時に文科省に対する色々なアプローチしているんですが、東京の大学って結構予算取ってくるんですね。文科省の話、例示なんですけど実は役人が委員会とかみんな東大とか旅費が掛からないので、そういう施設に集めて意見聞いているんですね。もう公募した時にはもうこんなの市長さんに言うのはもう釈迦に説法もいいところなんですけれど、もう出来レースで、3分の2ぐらい決まっています後の3分の1公募なんですね。できれば、折角いろんな議員さんとか、いろんなつながりがおられるので、八戸からこういうふうなモデル、例えば産学官「学」もこんなにコンパクトにやっていますよみたいな、他の自治体もいっぱいあると思うんですけど、それは八戸で発信で総務省とかにも働きかけて、それで枠組みを作っていただくととっても嬉しいです。そうなる一番最初に言い出しっぺが基本的に政府の役人もそんなに無体なことは言わないので、アイデアだけ取ってゼロで他のところってないのでアイデアがあったところにはちゃんとお返しますので、枠組みを作れるような力って八戸は私あるような気がするんです。いろんなユニークな取り組みそれから「学」とコンパクトなんですけれど、「学」と行政と企業さんというか商工会議所がこんなふうな枠組みを作って、他にも色々あると思いますが、そういうふうなと

ところで地方創生のネタ出しというかですね、そういうのを多分、令和3年度の、今からスタートしても令和3年度枠組み作るのは、4月ぐらいにディスカッションして文科省の例だと、あと8月に枠組み決めて、あとは12月の予算案までもっていく、あと財務省の説得とかそういうふうな話になるんですけど、そういうふうな小さくてもそういうふうなものを色々な、衆議院議長さんもおられるし、いろんな形でうちではこんなことやっている、それは八戸だけのはやるは困るんですが、このくらいのサイズのまちで元気なところこう努力しているのでそういう予算の枠組み作ってくださいみたいなことをお願いしていく。その時にこういうふうな中長期計画とかその中のいろんなネタを出して、それで枠組み取ってくるみたいなことをやるといいのかなと。ただこれはとっても大変ではあるのですが、まずそういうのも視野に入れていただくと嬉しいなというふうに思っております。

○小林議長（八戸市長）：

内閣府でメニューを作る時には実際はある程度いろんな団体の取組を念頭に置いているケースが結構あるんです。その実際の取り組みを応援しようということを、そういうことは絶対言わないと思いますけれど、少し念頭に置きながらメニュー作って、一般の実際それを見ながらこれうちでやっている、これからやりたいなと当てはまる的なことで申請しているというのが実態ですから今おっしゃったようにそのメニューを作るまでにいろんな形で働きかけるということは十分可能性あると思います。

○水野委員（八戸学院大学学長）：

今一点だけちょっと。この先ほど図の中で4大学の色々チャレンジメニューを作っていこうということで話が進みます。キーワードとしては長谷川学長からもありましたけれど、防災というところもひとつのキーワードだと思いますし、それから学生のアイデアコンテスト、2人に1人が大都会に行きたいと言っている高校生、中学生のこの八戸の若者に少し八戸の魅力を知ってもらおうと、導き出そうというようなコンテストがあっても良いのかなということで圓山校長とも今そういうことを考えています。あと県政も市政もSDGsをキーワードにしているので、その辺りテーマにしながら八学ではフォーラムを作っていこうかというふうなことも考えておりますので、こういうチャレンジメニューをこの4大学で色々検討させていただきながら提案させていただきたいなと思っています。加えて、八学大では八戸の水産業の未来をどうしていくんだということで3つの機能を持っている八戸港のあるいは八戸の水産業の未来を語る会というのを準備を進めています。こういった点を改めてまたご案内させていただきたいと思いますので、チャレンジメニューに何か財源がつくのかどうかなども色々情報いただければなと思っております。以上です。

○小林議長（八戸市長）：

はい、色々ご意見をいただきました。具体的な修正箇所については先ほどお話があった件以外には宜しいでしょうか。宜しいですか。

○事務局（八戸工業大学・高橋教授）：

軽微な修正等は随時この計画を動かしながらさせていただきたいと思えます。中長期計画案につきましては、基本的にこの案をとって実働の方に移らせていただきたいと思いますと思えますが、長谷川学長からいただいたご指摘等は動かしながら修正していくということで、案をとらせて実働のほうに入らせていただいで宜しいでしょうか。

○小林議長（八戸市長）：

長谷川学長さんから意見があった部分については、早急に文案作ってそこだけは案をとる時には直した形で、事実上というか持ち回りでもなんでも良いですが、確認いただいてそれで施案作ってもらって、お願いしたいと思えます。

○事務局（八戸学院大学・田中教授）：

稟議という形でいただいて案をとるという形で。

○小林議長（八戸市長）：

そこは軽微ではないと思うのですが。宜しいでしょうか。はいありがとうございました。それではそのように進めさせていただきます。その他何かございますか。

○赤羽委員（八戸学院大学短期大学部 介護福祉学科長）：

時間のないなかかもしれないけれども、先ほど水野学長からもお話があった 21 ページの図の関係で若者定着ということが書いてあるんですけども、恐らく大学生が卒業する時に自分が 10 年くらいの間に結婚して子供を持つというふうなことが考えて、ほとんどの人が考えてないと思うのですが、現実として八戸市にとって子育てをしているということが数年以内に出てくる若者にたくさんいると思うんですけども、そうした時に子育て支援といったものをどうするかということが若者の定着の中でもすごく大事になってくるのではないかと考えております。あとは子育てしながら働きながらというふうなワークライフバランスというような考え方、政府が薦めているところでも所でもございますけれども、そうしたことについても、この計画に書けないとしても、これと関連する先ほどから何回も出てますけれども、総合計画の中でしっかりと書き込んでいただければなと思っております。あと例えば年次休暇の取得率とか今国の方ですごく薦めている働き方改革の中で薦めているようなことについても、八戸の企業は休暇も取り易いし、いわゆるブラックな企業ではないと。地元で働くことで自分なりの生活を実現できるというイメージを若者に大学の時代から伝えていくということもすごく大事ではないかなと思っているわけです。すいません、時間がないな。

○小林議長（八戸市長）：

いえいえとんでもないです。ありがとうございました。その他ございますでしょうか。宜しいですか。それでは最後になりますけれども長谷川学長が今年

度末をもって学長をご退任されますことから当会議へのご参加も今回が最後となります。恐縮ですけれども一言ご挨拶いただきたいと思ひます。

○長谷川委員（八戸工業大学 学長）：

どうもありがとうございます。4年間担当させていただきました学長職が終わりまして、八戸工業大学を退職させていただくことになっております。私は根っからの八戸市民でございますので、引き続き八戸市民としてみなさんの活動を見守りたいという立場で応援させていただければと思ひます。本当にお世話になり、ありがとうございました。

○小林議長（八戸市長）：

長谷川学長におかれましては引き続きこの会議もそうでありますけれども、先生方とのこれからもご協力よろしくお願ひします。

○長谷川委員（八戸工業大学 学長）：

こちらこそよろしくお願ひします。ありがとうございました。。

○小林議長（八戸市長）：

それでは司会の方に進行をお返しいたします。

○事務局（八戸工業大学・高橋教授）：

ありがとうございました。最後に、今後のスケジュールの確認ですが、次回は改めて日程調整させていただきます。開催が近づきましたらご案内差し上げますので、どうぞよろしくお願ひいたします。それでは、これをもちまして、令和元年度 第3回八戸産学官連携推進会議を終了いたします。本日はありがとうございました。